
月 刊

MAROAD

Vol.175



2022.07.31

詩と評論

月刊「Maroad」

Vol.175.2022.7.31

「月刊まるごと」編集部

ロルカ詩祭

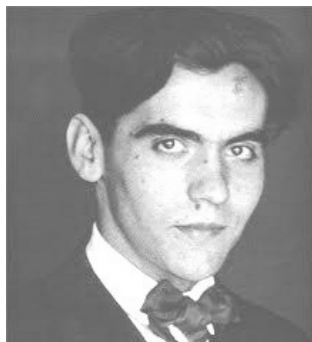
第25回

詩人たちの戦争

大橋愛由等



それは〈詩人たちの戦争〉だったのかもしれない。スペイン内戦(1936-1939)は、共和派側と叛乱軍側におおくの犠牲者がでた。われらのフェデリコ・ガルシア・ロルカは1936年8月19日に故郷グラナダでフランコ叛乱軍によって銃殺されている。このフェデリコの死は、同時代のスペインの詩人たちにとって衝撃が大きく、マチャード、アルベルティは追悼詩を書いている。内戦が終了したのち、二人は共和派側であったために、ピレネーを超えてフランスに逃げる。しかしマチャードは心労のために客地で死去。アルベルティはなんとかパリに逃れたのちアルゼンチンやローマで亡命生活を余儀なくされた。この戦争で忘れてはならないのは国際旅団という名の多国籍義勇兵が多く参加したことである。アイルランドの詩人チャーリー・ドネリーも参戦。「Even the olives are bleeding (オリーブさえ血を流している)」という言葉を残して戦死している。この内戦が導火線となって第二次世界大戦が勃発していることを忘れてはならない。ちょうどこの構図がそっくりそのまま今のロシアによる〈ウクライナ侵攻〉→〈第三次世界大戦〉にも連関しそうで、怖い。



2022年 8月20日



反復される 詩人たちの 悲しみよ!!

オリーブさえ血を流している
Even the olives are bleeding



〈朗読の伴奏者〉

田村太一

神戸市出身。16歳〜23歳までアメリカで過ごす。ランディー・ワイヤーに師事。ロックバンド「KAYA」のギタリストとしてメジャーデビュー。バンド解散後、ソロギタリストとして音楽ジャンルにとらわれない音楽活動を展開している。

〈詩祭スケジュール〉

8月20日(土)午後5時 開場

「1部」PM5:30〜PM6:00

「2部」PM6:15〜PM8:30

朗読者の自作詩朗読

〈ロルカ詩祭〉は、スペインの国民的詩人であるフェデリコ・ガルシア・ロルカ(1898-1936)がファシストによって銃殺された8月19日近くの土曜日に開催する詩の朗読会です。ロルカ生誕100年の1998年から神戸三宮のスペイン料理カルメンで開催しています。

ロルカ詩祭会場 スペイン料理 **カルメン**

☎078-331-2228

神戸市中央区北長狭通

1-7-1 カルメンビル2F

阪急・阪神・JR・地下鉄の各三宮駅から徒歩1〜4分



「月刊まろうど」175号 目次

詩・俳句

泥だんご(俳句) ……乾佐伎 4

ON THE 魔ROAD 詠(俳句) ……岩脇リーベル豊美 4

まろうど句会に出稿された俳句一覧 ……六人の作家たち 5

浮き島 ……いなだ豆乃助 6

桐生厚生病院 ……前田雅正 7

鉄砲製作所 ……中嶋康雄 12

忘却と覚醒/骰子/謎々生煮え(詩) 六十秒詩(短歌) ……野口裕 13

螺旋な困惑 ……大橋愛由等 16

五月 ……黒田ナオ 17

ほろほろちょう ……月村香 17

背景ソネット ……大西隆志 18

数の魔術 ……富岡和秀 19

案内

第22回ロルカ詩祭〈2022年8月30日〉 ……ロルカ詩祭実行委員会 3

ART NOTE

珈琲タイムレッスン(大人の絵画教室)⑦ ……はらだてつろう 14

連載小説

『マルクスの場合』—①マルクス・アウレリウス ……諸井学 10

18回目/「海猫堂店仕舞記」 ……千田草介 11

連載 評論・エッセイ

創造力の彼方へ〈15〉 ……大西隆志 15

ヨーロッパ一人旅 〜スコットランド編〜 ……モス堀渕敏子 8

レガートな日々〈3〉 ……原田ひでよ 9

神戸詞あしび〈162〉「姫路文学学校準備室スタートし一回目は津村喬語り」 ……大橋愛由等 20

編集部だより★97/「ロルカ詩祭」の季節が近づいてきた。1936年8月19日に故郷グラナダで、叛乱軍によって銃殺されたロルカの死は、同時代人の詩人たちにとつてもない衝撃を与えた。ロルカと同じく「1927年世代」という詩のグループに属するラファエル・アルベルティ(1902-1999)は「おのれの死をもたなかった詩人への悲歌—フェデリコ・ガルシア・ロルカ」という追悼詩を書いている。チリの詩人ネルーダが1935年スペインへ総領事として赴任したとき、ロルカ、アルベルティ、セルヌーダ、サリナス、ミゲル・エルナンテス、マレロ・アルトラギラーレらがマドリで迎え、「詩のための緑の馬」という詩誌を発行している。これらの詩人たちは全員「共和派」を支援していたが、1939年には、世界各国から参集した「国際義勇旅団」が5000人の犠牲を出し、フランコひきいる叛乱軍が勝利してスペイン内戦は終結した。アルベルティは敗戦の混乱のなか、3月にスペインを脱出し、ネルーダが勤務するパリに向かった。ここでアンドレ・ブルドンらと出会い、シュルレアリズムの詩の書法に影響を受けている。しかしフランスも安住の地ではなく、アルベルティは「さまようスペイン人」として南米のアルゼンチンに向かう。フランコが支配するスペインでは内戦終了後、共和派側の人間に対して苛烈なまでの粛清がつづいていたので、帰国は絶望的だった。「ある日 おまえのうえに爆弾の雨が降りそそいだ/そしておまえの火だるまの牡牛となった/ああ そのなま殺しの牡牛は/いま 火あぶりにされているのだ」(「海のうえの牡牛」より)。わたしがこうしてロルカ以外の「27年世代」の詩人アルベルティの作品に接したのは、『マチャード・アルベルティ詩集』(大島博光訳、「世界現代詩文庫」土曜美術社出版販売1997)を偶然にも三宮駅前古書店で入手したからである。/今月の読書会は詩人・月村香氏が担当。テーマは、「アンドレ・ブルトン『溶ける魚』を読む」です。(大橋愛由等)

- 朗読者
- ① 安西佐有理
 - ② 大西隆志
 - ③ 大橋愛由等
 - ④ 金里博
 - ⑤ 今野和代
 - ⑥ 千田草介
 - ⑦ 高木敏克
 - ⑧ 高谷和幸
 - ⑨ 月村香
 - ⑩ 永井ますみ
 - ⑪ 西海ゆう子
 - ⑫ にしもとめ
 - ⑬ 野口裕
 - ⑭ 原田哲郎

〈場所〉スペイン料理カルメン(神戸市中央区北長狭通1-7-1)電話078-331-2228(受付078-331-2228)

JR・阪急・阪神・地下鉄「三宮駅」から徒歩三分

〈料金〉A:3080円(チャージ・税込み) (1)夏の特選スープ (2)メインディッシュ (3)パエリア (4)コーヒー (5)本日のデザート B:3000円(チャージ・税込み) (1)ワンドリンク(選択可) (2)本日のタパス

〈特典〉当日参加者の方全員に、第一部参加の詩人たちが朗読する詩作品掲載の『八月—十九日詩集25巻』を進呈します。

◆泥だんご

乾佐伎

少しだけ虚しいですと薔薇揺れる
ドロップの何色ですかさよならは
何もかも捨ててひまわり畑のなか
プライドがあるよと光る泥だんご
本当はわがままなだけ薔薇が咲く
雲のこと話してみたいゴッホとも
たくさんの思い出が好き切り株は
もう泣くのやめて真夏の雲ひかる
今だけが確かにあつて薔薇を抱く

◆ON THE ROAD 詠

岩脇リーベル豊美

異国語でわかりあえては翻訳機
母語がアイデンティティでなくなる夏至
夏痩せて皺は一番の短夜か
翻訳機は初夏詠まずをり戦さ詠む
三ヶ国語ですべて了解し酷暑日
ラテン語のルター翻訳のごとく英語
祖国奪還は嘘と知りながら撃つ
翼生え死亡率300%の人間に
俳人寂し手弱女ぶりで詠めば
嘆く壁綺麗に死ぬまでの日盛り
草いきれ醜い白鳥の児の予言

◆富岡和秀

桃源郷へ渡る吊り橋切れている

敗残や雑のことばを月に添え

寿司折りを青葉にしずめ山の神

アシケナージの蟻煮出してみるといい

未来史は砂マンダラの風で書く

雑民を掲げた郷里で旗を振る

終活のつもりが讞をかき回す

水晶のかけら地下水道を神話化して

時が溶ける急がねばならぬアルカディアへ

古書棚の背に雑の付く題辞あり

福耳の列が讞の笹聞く

夏至ゆえに聖霊の肉ほうばりキキキ

蒼い瀑布に虹のかがやき星燃える

我雑なり 七夕の夜に敵何処

申カツの串が笹竹星の恋

荒野に消えた喜劇執行人たちの赤札

隠された青薔薇の美がこぼれている

雑を手に活かされる吹流しなどなく

くるぶしに送風真夏の夜の夢

パラレル黄蛾濁世から脱目の軀体

◆大西隆志

雑考

◆野口 裕

山の神

◆大橋愛由等

精霊の脱自

★岩脇リーベル豊美、乾佐伎の句稿は4頁に掲載

◆浮き島

いなだ豆乃助

浮気性なぼくらが浮き島に行くことにしたのはお互いの日常生活から逃避したいからだ。だがそこは浮き島。あくまでも漂う島であって、堪え性のないところ。どこまで漂うのかは、風に尋ねて欲しい。

◆野草いろいろ

いなだ豆乃助

(オオバコ科オオバコ属)

踏まれた象は夜遅く

新聞売りの声に負け

泣き上戸の姉さんは散弾銃のごとく

蒸し器の中で踊り出す

(ススキノキ科ワスレグサ属)

ヤブカンゾウ

花の直径80ミリ

新芽は食べると美味しいが

わたしは食べたことがない

◆なしくずしの死

いなだ豆乃助

(なしくずしの死)と眩きながら一杯のヴェルモットを所望するわたし。泣き上戸のゴーゴー娘は殺伐とした鯨御殿で唄う流れ者(東京の)。もって生まれた大八車。宍戸錠の黒眼鏡と三年寝太郎。マーマレードたつぷりと塗りたくったトーストをかぶりつきゴダール扮するゴドーを待ちながら、今朝もきつと寒いです。

◆桐生厚生病院

前田雅正

群馬県桐生市の渡瀬川河畔に桐生厚生病院がありました。縁あってぼくは、ギランバレー症候群という十万人に一人しか罹患しないという難病のためそこに入院しました。手足が段々動かなくなっていくって、お箸もスプーンも自分で扱えなくなり、アーンと言って看護婦(看護師)さんにご飯を食べさせてもらっていました。周りの人はいいなあとうらやましそうに言うけれど、ちつともよくはありませんでした。トイレだけはなんとか自分で思うのですが、終わったあと便座から立ち上がるのに大往生、鍵を開けるのも大奮闘、さらに病室に歩いて戻るのさえ大仕事でした。もうあかんわ、おかんに来てもらおかなあ、と真剣に悩んでいました。

そんな日常のある晩のことでした。廊下や隣の病室で大騒ぎして、大暴れしている音が聞こえてきました。どうやら隣室のうどん屋の親爺が夜間病室を抜け出して、お酒を飲みに行ったあげくベロンベロンに酩酊した結果のようでした。アル中の肝硬変で入院しているくせに人の安眠を妨げるのはけしからんと腹を立てて、若かったぼくは親爺を取り押さえてやろうかと思いましたが、歩くのもままならない身であることを思い出し、苦笑しながら今日は堪忍しといたらあ、今度やりやがったらしばきたおすどワレと心の中でそつと罵って寝てしまいました。

それから三日ほどして、親爺ははかなくなり病院の火葬場の煙となり果ててしまったのでした。その煙を病院の屋上から眺めて、なんとも遣り切れぬ寂寥感を感じました。まるで心の中

を赤城おろしが吹き抜けていくかのようです。親爺は自分の死期を悟り、怖くたってたまらなくなり、酒に逃げて暴れていたようです。

その頃毎日ぼくらの病室に遊びに来る女子高生がおりました。自分の病室にはお年寄りばかりなので面白くなく、若者の多いぼくらの病室に来ていたようです。かわいらしくしておればよいのに、なぜか憎まれ口ばかりを吐いておりました。その子が二三日来ないなあと思っていたら、入院していた原因の再生不良性貧血が急激に悪化して死んじゃったそうです。しばらく後に、なめたあかん女を演じていた女優さんが亡くなったことで話題になったあの病気です。元氣そうでどこが悪いのかしらというような子だったのに、突然にいなくなつて煙になつてしまうなんてと、理不尽な死に苦い悲しみがこみ上げてきました。今では不治の病ではないのに。

真つ黒に寂しかったんだらうなあ……、もつといろんなことを聞いてあげればよかった、ぼくはちつとも優しくないやつだとの後悔の思いに苛まれました。

その頃病院の消灯時間は九時でしたが、暗くなった真夜半の病室に誰かが徘徊しているのに気付く経験をしました。動き回る気配とともに、すすり哭く声がかすかに聞こえましたが、病院とはそうした処だという思いがあり、そして自分ももうじきそのうちの一人になるのだと感じ、別に怖くありませんでした。その時はどうしてそんな風を感じたのだろうか。

四十五年余りたったこちらの世界から思い起こしてみると、そんな晩に桐生祭りの八木節音頭が遠くかすかに、でも元氣よく聞こえていたことを憶えています。別の世界の、遠い昔のお話です。

1982年(昭和57)6月下旬、伊丹空港から出発し、アラブ首長国連邦のアブダビを経由してロンドンに向かった。日本人女性二人連れと一緒に便だった。彼女たちはFIFA W(ワールド)杯のスペイン大会を観戦するのが目的だった。スペイン各地を巡って、一日五千円の手算だという。

今こそFIFA W杯は日本でも人気があるが、その当時はほとんど話題にものぼらなかった。わざわざスペインまで観に行くとは、本当のサッカーファンだと言えるだろう。

イギリスに着いたものの、これからが問題だ。電車に乗り換え、ロンドンのキングスクロス駅から5時間かけてエディンバラ駅に到着した。タクシード来てほしいと言われタクシーを利用した。

ホストファミリーは、30代半ばぐらいの奥さん、4歳の女の子、それにおばあちゃんの3人で迎えてくれた。そしてイタリア人の一〇代の女の子、フランス人の二〇代の女性もルームメイトとして紹介された。ご主人は単身赴任中で、週末帰って来るようだった。

エディンバラはスコットランドの首都で、人口はグラスゴーのほうが多いが、政治と文化の中心である。旧市街と新市街がまじりあつた美しい街並みはユネスコの世界遺産に登録されている。

気候は思ったより寒かった。きけば五月に二回雪が降つたという。緯度の高さを考えればわかりそうなものだけど、そのあたりの考えが

甘かった。私の他にイタリア人の子も何人か風邪をひいたという。

ある日テレビをつけると、全くわからない言語が聞こえてきた。翌日奥さんに聞くと、ゲール語(Gaelic)だという。ゲール語はケルト系言語だが、話者の急減と高齢化で消滅する可能性があるという。

語学学校へは歩いて20分かかった。最初、私は文法がよくできるの上のクラスに入ったけど、スピーキングについていけず下のクラスにかえてもらった。クラスメイトはイタリア人が多かった。フランス人、スペイン人、ブラジル人、クウェート人もいた。日本人は別のクラスに一人いただけだった。

その年のFIFA W杯では、イタリアがドイツを破って優勝した。イタリア人クラスメイトは、どこから調達したのか知らないがイタリア国旗を持って、メインストリートにあたるプリンス通りをパレードしていた。さぞ誇らしかったことだろう。

スコットランドの伝統料理のハギスというのも奥さんにリクエストして食べさせてもらった。ハギスは羊の胃袋に羊の内臓、玉ねぎ、オートミールなどを詰めて煮たものだが、物足りない気がしてケチャップをかけたらルームメイトも私のまねをしていた。

私たち日本人は、イギリスというひとくりに考えがちだが、ここではスコティッシュとイングリッシュが全く別だというのを知り知らされた。昔は別の国だったし、今でも大英帝国から独立したいと思っている人は大勢いる。どちらがいいのか私にはわからないが。

レガートな日々③ 原田ひでよ

左手の逆襲

リストの「愛の夢」をさらつていたが、下降のパスセージがどうも気に入らない。こういう時、まず疑われるのは左手。「あなた、ちよつと一人でやってみて」左だけ取り出して弾いてみると、意外にもちゃんと弾けている。では、もしや? そう、きれいに粒がそろつてない張本人は、右手だった。

ピアノは、ひとりの弾き手が二つ以上のパートを同時に受け持つのが常である。両手で全パートと一緒に弾いていると、なあんとなく弾けているかのように聞こえたりするが、実はどこかのパートが、あるいは全てのパートが、ちゃんと弾けてないなんてことは、ままある。

右手はたいい利き手なので、何をやらせても要領がよく、指や腕の力も強い。主旋律を受け持つことが多いので、どうしても主導権を握り、左手を従わせようとする。でも本当は、音楽の良し悪しは、左手が握っている。学生の頃、徹底的にたたきこまれた「音楽はバスから」つまり名伴奏者だとリストは弾きやすくてうまく演奏できるということ。だからこそ、いつそう左手への風当たりは強くなる。

2017年7月、ちょうどこの原稿を書いている今時分のこと、帯状疱疹にかかつてしまった。9月にはモーツァルトソナタ全曲シリーズ三回目的

本番を控えていた。発疹は、左の二の腕から手首に集中。

顔にもお腹や背中にも足にも、出なかった。

「なにか左腕だけを酷使するようなこと、しましたか?」と診察で聞かれてドキッとしたが、まさか「ダメな左手を特訓していたところですよ」というわけにもいかない。実はこの頃、左手の劣化に悩んでいた。左手のコントロール力なくして、これ以上の演奏は見込めないと判断した私は、左手のための強化特別訓練を行うことにした。指の強さや、しなやかさを得るための基礎練習を課したのである。その結果が、これであった。

当初は軽く考えていたが、症状は一向にかんばしくなく、ひと月以上ともに弾けない日が続いた。

厳しく鍛えるはずが、病気で弱つた上に練習ができず、左手は余計に軟弱になってしまった。ペインクリニックを紹介されて、ブロック注射も打ってもらつたが、思わしい結果にはいたらない。

洋服に袖を通すにも 扇風機の風が当たるにも 物を持つとう動かそうとするにも

強烈な痛みが走つた
それは 腕から肘を通つて 手首 そして
ピアノを弾くとき全指の支え 軸とも言われる
親指に繋がる神経に集中していた
これは クーデターか

私は過重労働を強いられてきたのですよ
という瀕死の叫びなのか
それとも 最終警告
もう最後の言い渡しなのか

「調性」をテーマにした第三回は、幸いにもほかの回に比べて、どのソナタも比較的小ぶりでテクニクも軽めだった。他の回のように大曲や難曲が並ぶプログラムだったら、持ちこたえられたらどうか?

オーボエとの後半は「ピアノ以外の楽器にとつてのモーツァルト」がテーマだったので、チラシに打ってしまったその関連の曲は死守して、ほかはピアノパートの負担が少ないものや、無伴奏のものに差し替えた。楽しみにしていた新しい作品への挑戦は次の機会に見送り、なじみのあるレパトリイで手堅く。アンコールの二曲は、もうヘロヘロであごが出そうになり、共演者はちらりとこちらを見ていたが、なんとか事無きを得た。

左手がへそを曲げ、ドロップアウトしてしまつた事態に懲りた私は、それ以降、方針を変更した。「あなたは右手を支えて、ほんとなによりやってくれている。こんなに音楽的なんだもの。伴奏や、縁の下の力持ちばかりやってないで、ソロをやってみない? コンサートで、右手なしで演奏するのよ。どう? エキサイティングじゃない?」

昔、右手を痛めた時期があり、実は左手だけの曲もいくつかあった。楽譜を引つ張り出してみれば、ちゃんとレッスンも受けているではないか。そのうち、コンサートの左手のための曲が一目見えた時は、「まあ、原田さんの左手、ご立派になられて、とうとうソロデビューですか」と感慨と興味を持って聞いてやつてくださいます。

※さう 練習すると言った意味合いで、演奏者達
は一般的にこう言う
(ピアノリスト)

◆ 『マルクスの場合』 ① マルクス・アウレリウス

諸井学

「ダメだ」父は言下に否定した。「そんな共産党みたいな名前はダメだ」

父は明らかにカール・マルクスと混同していた。さらに悪いことに、父は私がアカであると誤解していたのだ。

私は学生時代から左翼が大嫌いで、大学紛争の、マルクスやレーニンにかぶれた阿呆どもに、君らが信奉するソビエトで反体制を言えば、シベリヤへ送られるのは間違いないと教えてやった。君らは所詮自由民主主義の手のひらの上の悟空に過ぎない、と。阿呆どもは私を帝国主義の手先であると罵った。頑迷なサヨクの闘争者たちよ！

しかし、父の誤解にはわけがあった。入社して間もない頃、私は営業マンの人格改造を企むセミナーに参加させられた。講師のコンサルタント氏の薄っぺらな精神主義、がかつた人道主義の話に辟易させられた。

彼は言った。「諸君の置かれた環境は、可能性という名の広場を眼の前にした小さなジャングルでしかありません。君達が可能性を信じて苦しみの一つ一つを蹴飛ばしたり、ねじり倒したり、前進するならば、君達の報われる日は、必ず来るのです」まるで寝言だ。

そしてこの時、私にも小説を書いていると口走ってしまったのだ。その時はだれも私に小説のことを訊ねる者はいなかった。ところがその日の夕食の時、コンサル氏は興味深そうにテーブル越しに訊ねてきた。

「どんな小説を書いているのかね、きみ」

「いえ、前衛小説なので、とてもお話できるようなものではありません」

彼は推理小説や時代小説とかを期待していたようだが、私の書くものは粗筋よりも形式に腐心する、現代文学の極北をめざす小説だったので、コンサル氏に高邁な文学の話をするのは不遜に思えた。その場はそれで収まったのだが、その後がトンデモない頓珍漢だった。数カ月後に私の上司が同じコンサル氏の別のセミナーを受講した時、彼は課長にこう訊ねたらしいのだ。

「おたくの会社の後継者はまだ共産党みたいなことを言っていますか？」

この浅はかなコンサル氏は、文学の前衛を階級闘争の前衛と誤解していたのだ。クノーもロブグリエも知らない。前衛と聞けば共産党だと思ひ込み、おのれに知らないことがあるという謙虚さはなく、全能のように教えをたれるコンサル氏。私がつとも嫌いなのは奴らの傲慢さだった。

課長はこれに驚いて、手柄を取ったように社長、即ち父に注進した。もちろん社内でも話題になったらしい。私は説明するのもアホらしく、言い訳をしなかった。それ以来、父は私をアカと認識してしまったのだ。

(つづく)

海猫堂店仕舞記 ⑱

千田草介

月照寺の境内を種球場として縦横無尽に転がって互いにお互いぶつかりまくる〈猫球〉。たしか〈シゴセンジャー・ピンク〉が養っている猫は十匹のはずだが、〈猫球〉の数はもつと多く、しかもまばたきすることに増えて見える。私は足元に球がころがってくるごとに蹴った。

「これこれといった何の騒ぎかね」いぶかつて現われた住職が惨状を見て立ちすくんだ。「野良猫が混じってきたのか。困ったものだ。猫は月の化身だから、ハッブル望遠鏡なんかのせいで、このところ新発見の衛星が増えて猫も増えたとみえる。ピンクちゃん、あんたが飼ってる猫の名前を呼んであげなさい」

「いお、えうろば、がにめで、かりすと！」〈ピンク〉が号令をかけた。「ガリレオ四姉妹、ハウス！」

すると四個の〈猫球〉がもとの猫のすがたにもどった。

「みます、えんけらだす！」〈ピンク〉は呼びつづける。「てちす、でいおね、れあ、たいたん！」

「これはこれは」ミロクさんが住職に声をかけた。「いつぞやはお世話になりました。かわらずお元気そうでなにより」

「いやいや、わたしはすでにこの世のものではありませんね。ただ、こうして月の世からときどき還ってくるぐらいです。そちらのハーヴァード氏とも知った仲です」

「そうでしたか。しかし、その月から来た男が月をポケットに入れるとは」ミロクさんがハーヴァード氏に言った。「いたずらが過ぎはしませんかな」

「気を悪くせんでください」ハーヴァード氏は悪びれるふうもなく言った。「わたしはバブルクンド大学の教授をしておりましてね。これは研究室での実験のひとつなのです」

「バブルクンド……」ミロクさんには何か思いあたるふしがあるらしい。

「もちろん、それはミロクさんが創造された都に相違ありません」ハーヴァード氏は言った。「ただそれは、アラビヤ人がかの地の砂漠のなかに見つけた輝ける都ではなく、月の砂漠に建設される都市なのです」

「月の砂漠……」

と、つぶやいた私にハーヴァード氏が言った。「おお、あなた、あの『月の砂漠』の作曲者と同じ在所の人ですね。月の砂漠とは、ふつう月が浩々と照る砂漠という意味に解せられますが、ほんとうは、そのものズバリ月の砂漠、なのだとすれば、都バブルクンドだって月にあつてしかるべきなのです」

(つづく)

◆鉄砲製作所

中嶋康雄

昨日出荷した鉄砲が人を殺したらしい
休憩時間に出されたドーナツが腐っていた
所員は婆さん以外全員食中りで欠勤しており
返品番号に下品な知恵の輪が絡まり
横たわる鉄砲に婆さんが子守唄を唄った
弱いことは良いことだった
弱いことは正しいことだった
鳥が死体を食べていた
食パンが婆さんのために配達された
真つ黒になるほど焼いた
婆さんは食パンに語りかけた
よるべがないねえ
敷地内の泥池からザリガニが上がってきた
鉄砲の穴にもぐりこんだ
銃口から真つ赤な鉄だけ出していた
伝票の処理をしなければならなかったが
ザリガニにも婆さんにも
今の電子システムは全然わからなかった
撃ち殺されたものはいつの間にか
鬼畜米英になっていた
ザリガニは「アメリカ」だった
ザリガニはなによりもザリガニだから
ザリガニにはどうでもよいはずだった

美味そうで愚鈍な所員が
やつとこさつとこ病み上がりで出勤した
目の前で転た寝をするその様子を
ディーブラーニングした返品は
涎が出すぎて銃身が乾いてきた
製作所の隅でいつまでも
返品がチカチカと点滅し
ザリガニに住処を提供し
新しく雇われた所員は次々に
名前も知られぬまま
行方不明になった
所内はとても清潔でとても明るかった
次々届く返品は錆がひどくて
もう売り物にならないので
所長が婆さんにそつと言った
そこらに捨ててきてくれんかねえ
置いてきぼりの所員の魂は
片隅でいつまでも
まねごとをしながら
婆さんの子守歌を待った
弱いことは良いことだった
弱いことは正しいことだった
ふとつた蠅が飛んでいた
婆さんは配膳に夢中だった
所員が小さな蝸牛になり這っていた
隅つこの油の虹を
食べていた

◆忘却と覚醒

野口裕

吸入器を使ってから
少し息を止める朝の日課が
夜にずれ込んだ
一足す零は零足す一
どうつてことない

◆骰子

野口裕

二と三は
均等という幻想に奉仕して
平行ではなくV字形にならぶ
大きく血のような一のかたわらで
ひっそりと

◆謎々生煮え

野口裕

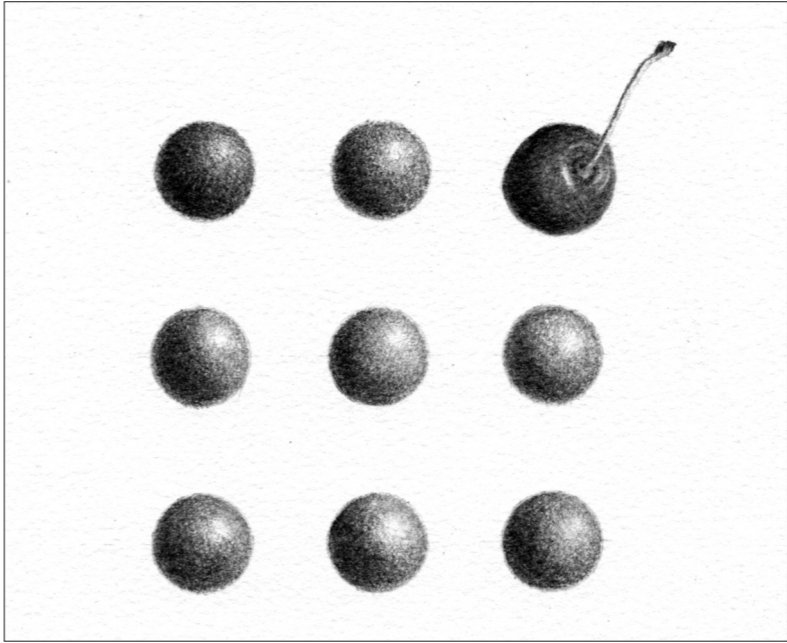
スフィンクスの謎は四足で始まるが
終に五足は登場せず
五本の指がそれを記す
謎々の答えはいつも恣意的だ
それを面白がるほど悟っていない

◆六十秒詩

野口裕

喉涸れを起こさぬものと呆れつつ赤子の泣くにしぼし聞き入る
剥がれつつ固定の箇所をなお守る養生テープの緑が戦ぐ
その頃のおよそ百年後を書いた近未来譚五十年経つ
ストマックウオッチいずれの午前午後尼で乗り換えディープサウスへ
ワイパーの扇の縁がすぐ滲み小止みなく降る雨の行く末

ART NOTE—⑦



- レッスン2—1の反省
- ・ 桜桃の色ではなく、光によってできる明暗の変化を見ることで、果実(球状)の塊りにできる陰が見えてきます。
 - レッスン 2—2 球とさくらんぼ
 - 1 球と桜桃
 - ・ 球を描く練習ですが、一個だけ桜桃にしてみました。
 - ・ ほぼ球体の桜桃と似た大きさ(直径2cm)の球を描きます。
 - ・ 対象(モデル)のあるデッサンと幾何形態(球)のデッサンの違いを経験しましょう。桜桃が準備できなかったら、球を描く練習をしてください。(桜桃の写真を見て描いてもオーケーです)
 - 2 球を描く(球状のかたまりを描く) (課題の目標)
 - ・ 直径2cmの円を3個ずつ適度な間隔で三段に並べて作図します。
 - ・ コンパスで描く円は薄く描きましょう。(内一つは桜桃)
 - 3 注意点(ヒント)
 - ・ 黒い縁取り線は立体感を失います。
 - ・ 光の方向を統一しましょう。(桜桃も合わせる)
 - ・ 暗い方から描きはじめましょう。
 - ・ 鉛筆の芯の先は丸くならないように注意。

はらだてつろう (美術家)

隣の公園のセミが一斉に鳴き出し、本格的な夏に入ったようだ。蒸し暑さは半端ないが、クーラーの効いた部屋で電気代を気にしながらCDを聴いている。ぼくが「押し」のミュージシャンで播州スラッジフォークと銘打っているカニコーセンさんのアルバム「汚泥フォーク」とはカニコーセン唯一の世界で、色々なアーティストが出てくる加古川でも異色の一人。新しいアルバム「PKNEWS IN MY MIND」に収録されている「リバーズエッジ」に胸が熱くなった。ライブでも聞いているが、あらためて聞くと一級河川加古川の風景が浮かんでくる。カニコーセンさんの住居も加古川大橋の下流左岸の堤防の近くなので、この歌のモデルになつては散歩や、なんとなくぼくも同じように加古川町木村に実家があり、河まで歩いて十五分程なかっただけ分かる。ぼくも同じように加古川と遊びによく行っていた。川幅もあるのが広がって、小高い丘陵地の山に陽が落ちていく光景に心惹かれていた。川面を眺め、河原に降りて行き、ドントと呼ばれる固定堰があり、そこは塩水と真水の境となつている。下流は河口に近い汽水域だから、シラスウナギがたくさん取れた。今から五十年以上も前のことなので、懐中電灯を点けると鰻の稚魚で透明な五センチほどのシラスが集まつてくる。大量に集まつてきて光のなかで真っ白いものが蠢くようだった。ぼくにとつて加古川の河の風景は、祖父母の家に預けられていて、産土の地の生家に還つてきた中学生にとつて癒される一人の場所だった。転校生でもあり友だちはまだ少なく、母一人子一人の家庭環境のぼくにとつては二階の自分の部屋と、加古川の河原や堤は繋がっていたことになる。カニコーセン作詞・作曲の「リバーズエッジ」を引く。

あたま抱えて日が暮れる
黙つても朝は来る
昔のことを思い出す

大西隆志 想像力の彼方に 〔15〕

川のそばをただ歩くだけ
別に他に何もなければ
今日なんともなく
どうにかはなるだろう
行き詰まつても時は過ぎる
シラけていても夜は来る
誰かのことを思い出す
橋の上を電車が通るだけ
別にとくにおもしろくもない
けどなんともなく胸が詰まる
ぼくらの町は川つがち
遠い煙突の向こう
音もなく沈んでゆく今日
名前も知らない鳥たち
川面の上を雲が流れる
だけ別に おもしろくもない
あたま抱えて日が暮れる
黙つても朝が来る
川のそばをただ歩く
さびた空を流れてく

寂しいような歌詞だが、川つがちの町をさまよう魂のあり方がうかがえる。生活者の日常の隙間にふと差し込む光景に響いていくのは、一瞬のことだとしても永遠をほんでいたりすることもある。それはそれぞれの人の心象にある消せない風景だ。山の奥で育った人の朝日や、海を毎日目の前にしていた人も、街中の坂道の途中で見た夕焼けも、暮らしのリズムのなかで微かな音を立てている。ぼくは琴線に触れるような旋律に乗って歌われたカニコーセンさんの言葉、それは川をかたわらに感じながら、時の移ろいを情緒抽象まで描くように思えた。見えるものを通じて見えないものを描いている。それは「さびた空を流」に自らのあり方を抽象しているようでもあり、ぼくの加古川時代の生活感とも繋がっていた。ある意味で楽天的になることで、胸の詰まりを越えようとしているのかもしれない。

加古川は古く「鹿兎川」や「賀古川」とも記され、ぼくの知っている呼び方では「氷川」とか「糞香川」などもあった。河川舟運も盛んな加古川流域は、高瀬舟による物流により経済を支えていた。そんな歴史もあり、加古川をゴムボートで下つたことを思い出し、抽出しをこそそしていたら、音楽仲間や友だちの幅くんとぼくの二人発刊のミニコミ誌が出てきた。それは一九七四年の「ねぼけまなこ」二号で編集はぼくがやっていた。二十歳前後の頃でぼくらは地元を職を得ている勤労青年。幅くんは農業協同組合、ぼくは市役所に勤めていた。高校は違っていたが、中学生の同級生でフォークソングと関わり、姫路のヘラヘラ十八番館やデザイナーの岩田健三郎さんの影響を受けて、加古川でコンサートや映画会などのイベントを企画していた次第。その宣伝素材がミニコミ誌の発行だった。その頃のぼくはヘンリー・デイヴィッド・ソローの『ウォールデン 森の生活』に魅せられ、自然のなかでのシンプルな暮らしからの思索に憧れてもいた。ブルグラスやトラデンショナル・ミュージック好きだったので、ジョン・ブアマン監督の映画「脱出」のサントラで有名になった「デュエリング・パンジョー」という曲をき

つかけとして、川下りの真似事をしようとゴムボートは底板の付いた本格的な物で、はたいて買った。手漕ぎのゴムボートは底板の付いた本格的な物で、四人ぐらいは乗ることができた。カヌーは当時一般的ではなく手にも入らなくて、高価なものだったので諦めたと思う。

ミニコミ誌「ねぼけまなこ」に川下りのことを予告したこともあり、一泊二日の加古川川下りのささやかな試みは神戸新聞にデカデカと記事となり、幅くんもぼくも職場でからかわれた。切抜きなどの資料も残っていないが、確か「冒険野郎」的な見出しだと思ふ。河口より少し上流のドント付近がゴールだった。かつての舟座があつた西脇の野村からスタートとなつたが、固定堰などは途中でボートを抱え上げたり、ゴムボートに乗っているよりも水量の関係で川の中を歩いていることも多く、「川の流れとともに川面から見える風景の発見」とはなつたが、のんびりとはいかなかった。炎天下での行軍となり、舟運の厳しさが身に沁み、舟座を巡れたことは良かったと思ふし、川風に吹かれながらの少し流れが速く、瀬になつては少しだけだが冒険を味わうことができていた。

さて、「脱出」のシーンのなかで、ギターとバンジョーで会話するように演奏するシーンがあった。ブアホワイトの知恵遅れのような少年と、都会のリッチな大人との掛け合いの演奏だったが、素晴らしいアンサンブルを奏でてハッピーになるのではなく、少年は握手を無視するように描かれている。アメリカの山岳地方とはたぶんアラパチア山脈の山深い場所、自然と文明をテーマにしたサバイバルのサスペンスだが、ある意味でアメリカの分断を予想している怖さもある。この原作者で脚本は詩人で小説家のジェイムズ・ディッキー。彼は詩人としては米国桂冠詩人。この原作本が初めての小説でもあり、酒井雅之訳で最初「わが心の川」で上梓されている。ぼくは出版後すぐに買った。その後タイトルが原題に近い「救い出される」と改題されて復刻されて読めるようになった。南部出身のディッキーならではの晦渋がぼくには響いていた。詩人としても素晴らしい。

◆螺旋な困惑

大橋愛由等

ふたつに別れていく
どちらでもいいのだ
緑の不寛容な荒野から
雲がいつもたなびいている部屋
に置くようになった
水平分度器が
一日に二度調子はずれな
シーニュとともに指図しようとする
情況と言葉の剥落の予兆を
聴いてあげないと
不満を言い出すのだ これは
寝不足の詩人を起こさないように
しているぼくの日課に似ている
朝の風がかなしくて
だれかが泣いているので

刻をとめようと
柱時計の前に立つ
「せつない、せつない」と時を刻む
窓の外には
メランコリックな
オレンジの樹の葉群れ
したたる樹液が
ぼくを快楽にさせ
翻訳小説を10頁ほど
読みすすみ
樹液は午後の街に
誘っているようでいて
蠱惑的だ けれども
街は仮面をつけていないと
異語を弄していないと
いつもせかせか歩いてばかりいる
石がいつせいに
寄ってきてその日のぼくの言葉を奪う
奪われた日はかならず
月の化身と名乗る女がぼくに代わって
「あなたが言いたいことはね」と
語りだし「螺旋の困惑を自壊するのには」

「水平分度器の空腹を満たさないとね」
などというのだ
ぼくはぼくがかぶる仮面が
ちつともそれらしくないことを
知っているので石たちは
ぼくを見つけると言葉を
奪っていく ほとんど毎日
樹液を吸っていた蝶たちが
帰宅するようにぼくを周回する
彼らはかなしきを知っている
のかもしれない
ようやく起き出した詩人
不出来な仮面をテーブルに置き
奪われた言葉を回復しようとする
「柱時計の言ったとおりだわ」
ぼくとディアログしようと思せず
水平分度器に遅い朝食を
与えるため いそいそ
隣室に消えていく
仮面から樹液がしたたり
明日の蝶を誘っている

◆五月

黒田ナオ

ふる雨、
雨がふっている。雨が地面にしみ込んで
しみ込んで。地面の下に、こっそり隠れて
聞いている。
目を覚まし伸びる音
誰かが誰かを呼んでいる微かな声
なにもかも溶けて、
五月はじつと待ち続ける。匂う、葉っぱ
にぎやかに飛びまわるものたち
もぞもぞ、蠢く。深く深く潜り込んだまま
土の中にいる、
ほのかな明るみ。

◆ほろほろちよう

月村香

お風呂のあわぶが
ほろほろほろ
汗が台湾のグラス三杯
眺むる本は
なめし革
理屈にもなく
あと七分入っただけ
この三日は まる
三日 眠っていたから
ひょうのうを
とつかえひつかえ

うえしたへ
理屈にもなく
理由もなく
もう三時間だに 沈んでいよう
心を病んだ子ひとりいて
体を病んだ子
またできて
いけないこととは思いつつ
ただ声を聞きたいばかり
理屈にもなく
理由もなく
電話口にて ほろほろ鳥
かあさん
かあさん
かあさん
わたしだめだわ
でも理由は言えないのよ
絶対に言えないのよ
かあさん

◆背景ソネット

大西隆志

人びとが立ち並んでいるが、表情がうかがえない
かすかに動いているのか、意思もないのに輪郭がほどける
雲ひとつない青空と緑に染まった原っぱでの一群
背景をなくしてはいないが、そう、落穂は拾われてはいない

街中だけではなく、流れゆく暮らしの日々をなぞる
届いてくるのはまんまるな気泡、つぶれやすい言葉か
主人公などは昔に退場して、気泡のなかのキャラクター
自然は丁寧に、群衆は曖昧にペンを走らせる

目に付く言葉と動く色彩の熱量に浮かれてしまう
黒いスーツ、白いシャツ、白い靴下、黒い靴、白いマスク
ぼくらは看守のように背景を気にしない

ゴーストは新たな真実を誘い出している、闇の深さと共に
背景を描き切る時間は足りないが、動かすための道具
オリジナルな個人のなかで沸騰しているようなのだ

◆数の魔術

富岡和秀

1 神話における数

神話学者によると、創世記に記述される人類最初のアダムの一生は九三〇年であった。その子セトは九一二年生きて死に・・・とどろ、十代目ノアの大洪水が起きた時、ノアは六〇〇歳。アダムの誕生から数えて、ノアの大洪水の始まりまでに一六五六年の時が流れる(創世記の記述をこの観点から読めば、神話学者でなくとも計数確認できる)。

十九世紀のアッシリア学者ユリウス・オッパートは論文「創世記の日付」で二六五六年が八六四〇〇週と示すが、神話学者が指摘するのは八六四〇〇割る二では四三二〇〇である。

古代バビロニアの神話的著作者でカルデアの紀元前三世紀の神官ペロソスによると、最初の都市キシュの創設からバビロニアの大洪水まで、四三二〇〇年。

アイスランドの『エッダ』に記されるところでは、戦士の館ヴァルハラに五四〇の扉があり、狼の日におのおのの扉から八〇〇人の戦士が反神との戦いに出る。神話学者の計算によると、八〇〇掛け五四〇で四三二〇〇である。

ヒンドゥーの叙事詩や古代伝承物語では現在の時間周期／カリ・ユーガの年数は四三二〇〇〇年。ユーガが属している「大いなる周期／マハー・ユーガ」は四三二〇〇〇〇年

また、四ブラス三ブラス二は九であり、古代ギリシャで「九」は芸術・詩の女神ミューズたちの数だが、その母神ムネモシユネーは記憶の神であり、想像力の源である。

インドで女神連祷のとき唱えられる神名の数は一〇八で、一ブラス〇ブラス八では九。一〇八掛け四では四三二二となる。

2 宇宙の数

黄道上の春分点は少しずつ西にずれ、黄道十二宮を完全に一周するには二五九二〇年を要する。「プラトン年」と呼ばれる数二五九二〇を、六十進法の単位六〇で割ると四三二二となる。「 $25920 = 60 \times 432$ 」となり、九の二倍だが、九は芸術の女神ミューズの数だ。

3 体内時計の数

人の平常時の心拍数は約六〇とすれば、毎分六〇掛け六〇倍で毎時三六〇〇回。十二時間で四三二〇〇回。二十四倍すると一日に八六四〇〇回の心拍数になる。

4 ピュタゴラス派と数の神秘主義

古代ギリシャのサモスの賢人ピュタゴラスは数の思想を標榜し、ピュタゴラス教団という言葉が秘密結社の設立を宣言したが、「宇宙のすべてが数の法則に従う」との思想がその核心にある。「あらゆる事象に数か内在する」のだと信じ言明する。

ピュタゴラスは「諸々の天とその天を運動する星々の全般的な調和／音階を理解してピュタゴラス自身は全宇宙の調和を聞いた」。

ピュタゴラス派の徒は、「諸物体が運行する時に音響が生ずるのは必然なことだと思っている。我々の周りの物体でさえそうなのだから、太陽や月や無数にある巨大な星々がその速度で運動する時には測り知れない音響が生じる」と考え、「それを前提にそれらの速力はいろいろ違った距離が原因で音楽的比例を持って、更にそれを前提に星々が円運動をする時に、調和的音響が生ずる」と主張する。

ピュタゴラス派の徒は「空虚は存在するが、空虚は無限な氣息から宇宙のうちに入って、宇宙がまた空虚を吸い込む。その空虚はあたかも連続する諸本性を区分する。その区分はまず第一に数においてなされるが、それは空虚が数

の本性を区分するからである」と宇宙生成論を語るのだからである。

ピュタゴラス派の徒は、「無限そのものや、一そのものを、それらが述語されるものたちの実体である。それゆえまた数もあらゆるものの実体である」と考える。

ピュタゴラス派の徒は、十対の原理をも語る。「限りと無限、奇と偶、一と多、右と左、男性と女性、静止しているものと動いているもの、直と曲、光と闇、善と悪、正方形と長方形」。このような対立表で十対の原理を語る。

またピュタゴラスは、「形のなかでいちばん美しいのは、立体のなかでは球であり、平面のなかでは円である」と言っている。ディオゲネス・ラエルティオスが伝えている。

5 宇宙の数的解明という観念

宇宙の秩序が、数的に解明可能という観念は、内的宇宙／ミクロコスモスと、外的宇宙／マクロコスモスの照応を成しているという思念にも結び付く。バベルの塔に例示され、世界上あちこちにある塔や寺院、教会などのようなジグザットはこの象徴である。現在なら電波塔や宇宙望遠鏡も見ようによっては単なる塔の科学技術品でなく宇宙からの電磁波を受け止めるとともに、人間の内的宇宙に形而下的思考に留まらない何らかの形而上的思念をもたらすことも可能だ。この世に有る人間の精神を有するという存在論に収斂すると、形而上的思念が沸き立つだろう。尤も科学哲学的思考にも耳を傾けなければならぬだろう。

人間の存在そのものが、壮大な宇宙の枠組みから超微細な存在者に至るまで「環」という大きな環境世界のなかにあるからであり、脳内物質をはじめとした皮膚やその他の臓器を身体として有し、身体を通して外界を知覚しているからであるし、人間は壮大な宇宙から見れば微塵の存在者であるからだ。この数の魔術性と存在論に思いを致すと、認識するとはぐちで自ずから、詩性／ポエジーが生じる。微小な人間は宇宙内存在であると知悉すれば人の心的部分からポエジーが生じるだろう。

神戸詞あしび

162-2022.07.31 大橋愛由等



姫路文学学校準備室がスタートした
発案者の大西隆志氏(左)と大橋

だ実け世まあり在なは
とが界見「力い潜見
考の現だるえい」でえ
考の現だるえい」でえ

「気」
は「見え
ない潜
在力」で
あり「い
ま見え
ている
世界だ
けが現
実なの
だと考

新しい文学メディアが誕生した。
詩人の大西隆志氏が発案した「姫路文学学校」。その準備
室が7月25日(月)に姫路市の「Quiet Holiday」二階で第
一回合会を開いた。
この会は二部制となっていて、第一部は「講義」、第二部
は「創作合評会」。合評の対象となるのは詩ばかりではなく、
俳句、短歌、川柳、エッセイ、小説など多様である。発足趣
旨には「われわれの文学学校は、姫路というトポスに立脚し
つつも、同時に地域性を超えた創造力あふれる文学や表現
を発信するメディアであることを目指したいと思います」と
ある。
一回目の会合の「講義」はわたしが担当した。テーマは「津
村喬という選択―身体・食・気功・焼酎・ノンセクタラデ
イカル」。評論家、気功師、社会運動家
など多方面に活躍した津村喬(1930-
2020)についてわたしなりに語って
みた。
その中で津村独自の思想展開をして
いる二つのことを記述しておきたい。まずは十代のころか
ら接してきた気功のことである。本場中国でも数え切れな
いほどの気功の流派があるなかで、津村は日本の風土に見
合ったスタイルを確立しようと努力していた。それにはま
ず「気功」の「気」について考察から始まる(引用は「気功へ
の道」創元社1991)。

姫路文学学校準備室がスタ ートし一回目は津村喬語り

展開である。

もうひとつ。津村は文学表現者ではないが、文章のスタイ
ルには深くこだわっていた。いわく「森鷗外から吉本隆明ま
での「国語の巨匠」に対抗してきた。初期柳田國男や碧梧桐
の「通信文学」の系譜に属するものとして認識するようにな
った」と鼻息が荒い。津村が目指した「通信文学」はもとか
ら通信をうけとる読者という他者が存在するという語りか
けを前提としていて、発信者と受け止め側の了解性が所与
のものとする文体である。
津村が範とする柳田國男や碧梧桐の「三千里」の文体が花
開いた例として、阪神・淡路大震災が発生した直後から津
村が書きつづけた「神戸からの手紙」を挙げておこう。これ
は不特定な読者に対する語りを前提としながら、普遍的な
内容であることを企図した「通信文学」の傑作といえよう。
この「通信文学」が誕生した経緯のひとつに「書かれたもの
の場所」(つまり既に多くのエクリチュールによって記述されて
いるという意味)である東京以外から発信するという必然も忘れ
てはならないだろう。

えているのではなく、「もうひとつの世界」があるという立
場から世界を見ていくこと、そしてその二つの世界に現存
在している私たちが、その見えない力をうまく認識し使う
ことで、ほかならぬそのエネルギーが凝縮したものである
の私たちの生命をもっと輝かしくしていくのが気功なの
だ」と定義し、「気」を具体化して捉えている。
さらに津村はこの「気」の有機性を考察する。「莊子の「何
もかも溶け合ってしまうという考え方」である「万物斉同」
を取り上げ、個のそれぞれの「気」は個の相違を超えた「親
和原理」(津村の造語)でむすばれている、とする。「気とい
うのは親和力」であり、AはBではないが、AはBに「似てい
る」。「相似象」と捉えることができるというのだ。つまり
気功の「気」は相似象の関係によって連関されている。こ
うした哲理の展開は、華嚴哲

一誌名変更のお知らせ

ながらく誌名を「月刊 Mélange」としてきましたが、
170号から「月刊 MAROAD」に変更しました。これは、
「月刊 Mélange」発行当時(2005年)から17年が経過
して、参加構成メンバーが入れ替わり、現在の誌友・詩
友たちとの連帯を確認し、今後の表現活動の切磋琢磨
を願うために変更したものです。(大橋愛由等)

2022年07月31日 通巻175号
発行所/月刊「まろうど」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通1-7-1 2F
編集・発行人/大橋愛由等
maroad66454@gmail.com
定価 660円(税込)